

「まさかとは思うけど・・・・」

わたしはひどく嫌な予感がして、テーブルの上に体をのり出した。

「何よ?」

そっぽを向いた姿勢のまま、彼女は一瞬、ちらりと目だけをこちらに向けた。

「一つ、聞かせてもらうけど」

「何よ?」

「覚悟はいい?」

わたしは吸い込んだ息をゆっくりと吐き出してから、低い声を出した。

「何よ、もったいぶっちゃって」

「聞くわよ」

「とっとと聞けば?」

明らかに動揺している。

瞬きの回数が増えているのが、何よりの証拠だ。

わたしは確信すると、背筋を伸ばして、彼女を見据えた。

「離婚したのね?」

自分でも驚くほど、凄みのある声が出た。

彼女の動きが、一瞬止まった。

店の中はひどくざわついていた。金曜の夜だからしかたがないのかもしれないが、仕事帰りに 待ち合わせをするカップルばかりが目に付いて、強制的啓蒙的状況というのはこういうことを言 うのだろうと、わたしは苛々しながら彼女の到着を待っていたのだ。

二十分ほど遅れてやってきた彼女は遅れたことを謝りもせず、あいも変わらずふてぶてしい態度で、前回会ったときと何一つ変わったところはないように見えた。

でもそれは、間違いだったのだ。

「な・・・・何言ってんのよ、いきなり」

彼女は組んでいた足を組みかえると、どこか調子の外れた笑い声を立てた。

「結婚式の翌日には指輪を外しちゃった人間だから、指輪なんかなくったって不思議にも思わない。ダンナ様に遠慮なんかするような人間じゃないから、しばらく顔合わせてないって聞いても、取り立てて何も感じない」

これまでの人生の中で、彼女ほどマイペースな人間をわたしは知らない。そこら中のマイペースが束になってかかっても、彼女ならびくともしないだろう。そんな彼女が結婚したということ自体、そもそもが、奇跡のような出来事だったのだ。

「引っかかる言い方ね」

「本当のことを言ったまでよ。結婚してこの方食事も作ったことのないような人間に、いまさら ダンナ思いの良妻ですなんて言わせない」

彼女の結婚相手は、驚くほど料理の上手な人だった。世の中上手く出来ていると言えばその通

りで、当人同士がそれでいいのなら、傍が口を挟むことではまったくない。もちろん、それで上 手くいっているのならという前提付きではあるが。

「ふん」

年甲斐もなく鼻の先からそんな声を出すと、彼女はさらに大きく、そっぽを向いてしまった。 わたしの言うことが否定できないとき、彼女はよくこんな態度をとる。大人げのないところが 、多分にあるのだ。

「だいたい最初から不思議だったのよ。いったいどうしてあなたが結婚しようなんて気になった のか。いつもいつも自分優先で、他人に気を遣うなんて生まれてこの方したこともない人

間が・・・・」

「ちょっと待ちなさいよ」

彼女はわたしを遮ると、ぐるりと体をこちらに向けた。

「何?」

「生まれてこの方って言ったわよね、今」

「言ったけど」

「あなた、あたしが生まれたころのことなんて、何も知らないじゃない」

「だいたい想像がつくわよ。生まれてすぐに、病院から歩いて帰って来たんでしょう? かわいげのない赤ん坊」

結婚式するけど、来る?

受話器の向こうから聞こえた彼女の声を、わたしは今でもよく憶えている。遠慮などかけらもない、恥じらいに至っては地球の裏側まで追いやったような、どこまでも慇懃な物言いだった。

「写真も見たことないくせに」

「見たくもないわ、そんなもん」

「今度見せてあげるわよ。腰が抜けるぐらいかわいいんだから」

「結構よ。だいたいあなたね‥‥ああ、もう、話しをそらさないでくれる?」

「そらしたのはそっちでしょ」

「とにかく、今は離婚の話しよ」

「ふん」

彼女は腕を組むと、露骨に不機嫌な顔をわたしに向けた。

「あ、あの……ご注文は……?」

遠慮がちな声に初めて、ウェイトレスがすぐそばに立っていることにわたしは気付いた。まだ 若いウェイトレスはひどく困ったような顔をして、わたしと彼女を交互に見比べている。

先に来たわたしはすでに紅茶を飲んでいたが、店の中が混み合っているせいもあり、遅れて来 た彼女の注文がまだだったのだ。

「ココア」

無愛想を絵に描いたような顔のまま、彼女は言った。

「かしこまりました。少々お待ちください」

彼女の態度などまったく意に介していない様子で、笑顔できちんとお辞儀をすると、ウェイト

レスはカウンターへと戻って行った。

「まったく大人げないったら。あの子は仕事をしてるだけなのよ。いい歳した女の八つ当たり ほど、みっともないものはないわね!

「ふん」

相変わらずの調子でそう言うと、彼女は窓の外へと視線を向けた。

その視線の先で、すっかり暗くなった空に、ちょうど半分に割ったような形の月が浮かんでいる。日の暮れるのがまた早くなったなと、白っぽく輝いている月を見てわたしは思った。年々加速度をつけて過ぎ去っていく時間が、こうして夜空を見上げるたびに身に染みる。今日もまた日が暮れてしまったと、そんなつぶやきが、どこからともなく聞こえてくる。

「別にいいけどね」

気が向いたときしか電話してこない彼女はいつも、こちらの予定などお構いなしに、出頭命令よろしく時間と場所とを一方的に告げる。そんなことにはとっくに慣れっこだし、断るほどの予定もない身としては、たとえ憎まれ口の言い合いでも、仕事とは無縁の相手と飲むそれなりの楽しさを無下にする気はない。ただ、そこまで見透かされるのはさすがに癪なので、しょうがなく来てやっているのだという態度だけは意地でも崩さない。

[....]

「意地張ってないで、話しなさいよ」

黙ったままの彼女の横顔を見つめた。

口さえ開かなければ美人の部類に入るが、人並み外れてマイペースなせいで、人の輪から外れてしまうことのほうが多い。よくよく話せば理解できることもあるのに、端から受け付けてもらえないことも、さほど珍しいことではない。本人の態度の悪さに結果が付随したということなのだろうが、それでも、身から出た錆と言い切ってしまうには、どこかもう一つ、突き抜け方に足りないところがあった。

あるいは、わたしだからそう見えるだけなのか。

仲間意識とか同類項とかいった言葉が思い浮かぶが、言いたいやつには言わせて置けと、そんな開き直りも同時に浮かぶ。

だいたい、彼女がただの超マイペース人間だったら、ここまで長く付き合いが続くはずはないのだ。

強いて言えば、信頼か。

その辺でとぐろを巻いている男どもより、彼女はよほど、信頼に足る。少なくとも、口先だけでものを言うことは、決してしない。

そんな彼女が結婚すると聞いて、腰が抜けるほど驚くと同時に、どこかほっとした思いがあった。肩の荷をようやく降ろしたような、そんな感覚だ。そして、一人だけ取り残されてしまったという淋しさも、正直なところ、ほんの少しだけあった。

お互い仕事が忙しくて、以前から、さほど頻繁に会う関係ではなかった。彼女が結婚してからはなおのことだったが、便りのないのはいい便りと勝手に解釈し、幸せにしているものと、そう思っていたのだ。

それなのに……。

[....

彼女は黙ったままだった。

言いたいことはすべて口にしてきた人間が、何をいまさら考え込むことがあるのか。

「せっかく喜んだのに。あなたのような人でも結婚できるんだから、わたしだってもしかしたらって」

「それはあなたの勝手」

ようやく口を開いた彼女の声は、挑発にのったにしては、少々勢いに欠けていた。

「そりゃそうだけど。でも、事情ぐらい話してくれたって、バチは当たらないでしょうに。今後 の参考にもしたいしね」

「嫌な女」

「その女を呼びつけたのは、そっちでしょ」

[····

「結婚ってのもまあまあいいものかもしれないって、そんなこと言ってたわよね?」

 $\lceil \cdots \rceil$ 

「誰かと一緒に暮らすなんて考えただけで身の毛がよだつって言ってた人が、ダンナがいないと何となく淋しいような気がするなんて、そんなことも言ってなかったっけ?」

 $\lceil \cdots \rceil$ 

「たった一年で別れたんじゃ、夢も希望もないわねえ」

わたしは聞こえよがしに、長くため息をついた。

一つ向こうのテーブルで、若い女の子の三人連れが、いかにも楽しげな笑い声を上げた。屈託なく笑えるのも今のうちだと、つい意地の悪さがこみ上げて、自分の狭量になおさら気持ちが沈んだ。

「・・・・そんなもんかなあって、思ったのよね」

正直に言ってしまえば、うらやましかったのだ。

[....]

「わたしだってあなたと一緒で、家に帰ったら男がいるなんてぞっとする口でさ、一人の気安さを骨まで味わってる人間だから・・・・でも、あなたが言うんならそんなもんなのかなあって・・・・ま、そうなってみないとわかんないけど、もしかしたらなんて、ちょっと違う見方で想像してみたりもしたのよね」

彼女が結婚してからというもの、夜空に浮かんだ月を見るたびに、いったいいつまでこうしているつもりなのだと、そんな自問が浮かんでくることも少なくはなかった。わびしくはないのかと、このままで本当にいいのかと、無意識の声がわたしを苛んだ。それもこれも、彼女がダンナ様と二人幸せに過ごしているのだと、そう思えばこそだった。

「・・・・どうして判ったのよ?」

少しして、むすっとした顔のまま、彼女がぼそりと言った。

「隠し通せるとでも思ってたの?」

「そうじゃないけど・・・・」

「さっき、冷蔵庫が壊れて動かないって話ししたでしょ?」

呼び出しておきながら、彼女はしばらくの間、どうでもいいような雑談しか口にしなかった。 特に用があったわけではないのかと納得しかけたが、話しが冷蔵庫に及ぶに至って、雲行きは 変わった。

おかしいと、すぐに思った。

「それがどうしたのよ?」

「ありえないのよ」

「え?」

「絶対にありえない」

結婚式のあと、二度ほど彼女の家に遊びに行った。二人暮しにしては大きすぎるほどの冷蔵庫がキッチンには納まっていて、彼の持参品なのだと言って、彼女は苦笑していた。あんなに大きな冷蔵庫を必要とするほど、ダンナ様の料理好きは筋金入りだった。そのダンナ様が、壊れた冷蔵庫をそのまま放って置くはずがない。

「あなたにとっては無用の長物でも、ダンナ様にとっては違うはずよ」

 $\lceil \cdots \rceil$ 

「あんなおいしい唐揚げ、初めて食べたわ」

「そ、そう?」

「炊き込みご飯なんて、料亭で食べるような味だった」

[....]

「で、いつから壊れてるの?」

「二ヶ月ぐらい前・・・・かな」

聞き取りにくい小さな声で、彼女は答えた。

「まったくもう……」

今度は心から、ため息をついた。円満な家庭の冷蔵庫が、二ヶ月もの間、壊れたまま放置されるはずがない。料理の好きな人間が家族にいれば、なおのことだ。

「ねえ」

言いかけて、ウェイトレスが近づいて来たことに気付き、言葉を止めた。

「お待たせいたしました」

若いウェイトレスは明るく言うと、彼女の前にココアを置いた。

「どうぞごゆっくり」

そして、さっきと同じようにきちんと頭を下げてから、カウンターへと戻って行った。かすかな柑橘系の香りが、ココアの甘い香りに混じるようにして漂った気がした。

「ココアなんて、珍しいのね」

彼女は人一倍コーヒーが好きで、昔から、一日何倍飲んでも平気な口だった。

「たまにはいいかなって・・・・」

あいまいに言うと、彼女はスプーンで何度もココアをかき混ぜた。

「前にあなたの家に遊びに行ったとき、何種類もの野菜や名前も知らない調味料が、所狭しと冷蔵庫に入ってたわ。それが今ではただの箱ってわけね。それも、並外れて大きな」

仏壇のように扉が開く存在感たっぷりの冷蔵庫を、わたしは思い浮かべた。

「小さいのを買うわよ。どうせ麦茶入れとくぐらいなんだから」

彼女はまだココアをかき混ぜていた。

「出来るだけ早くそうしたほうがいいわよ。あんなもん毎日見てたら、気持ちが海の底まで沈んでいくわ。・・・・ねえ、甘いもの、嫌いじゃなかったっけ?」

砂糖の入ったコーヒーを飲まされるぐらいなら死んだほうがましだと、ひどく大げさなことを言う人間だった。チョコレートさえ、よほど勧めない限り口にしようとはしない。そんな彼女とココアは、あまりにも不釣合いが過ぎる気がした。

「だから、たまにはいいかと思ったって言ってるでしょ。しつこいわね」 彼女は苛々した口調で言うと、ようやくスプーンをココアから引き上げた。

「タバコ、もしかしてやめた?」

一日一箱は吸っていた彼女が、今日はまだ一本も吸っていない。

### 「悪い?」

じろりとこちらをにらむ様子は、明らかにけんか腰だった。

「そんなこと言ってないでしょ。むしろいいことだわ、体のためにはね。でもあんなに何本も吸ってた人間がよ、工業地帯の煙突よろしく他人の迷惑も顧みなかった人間が、今日はまだ一本 も吸ってないじゃない。いったいどうしたのかしらって、普通は思うでしょう」

「あなたね、さっきから聞いてると、人のこといろいろ詮索しすぎなのよ。余計なお世話なの。いい歳した女が他人の詮索してる姿って、どこからどう見たって美しくないわ。醜悪よ。だいたいあなたって、昔から人のことばかり気にしすぎなのよ。自分のことは棚に上げて、人の行動ばっかりチェックして、そんなんだから、男がまたいで通るんじゃない。だいたい何で、呼ばれたからって金曜の夜にあたしなんかと会ってるわけ? 誘ってくれる奇特な人間の一人ぐらい、他にいないの?」

たがが外れたように、彼女の口が急に滑らかになった。

そう来なくちゃと思ったが、さすがに口には出さなかった。

「それこそ余計なお世話」

「心配してるつもりだけど、これでも」

「離婚したばかりの女に心配されるほど、落ちぶれちゃいないわ」

「思いやりってもんがないの、あなたには」

「同情してくれとでも?」

「・・・・ほんっとに、いけ好かない女」

一瞬言葉に詰まった彼女はそう言うと、ココアを一口飲んで、盛大に顔をしかめた。

店の中は相変わらず賑やかで、ざわざわとした話し声や時折上がる笑い声が、一定の音量を保ったまま、わたしたちを取り囲んでいた。ピアノ曲もかすかに聞こえてくるような気がしたが、 ざわめきの中に完全にまぎれてしまって、今ひとつ判然としない。 「冷蔵庫が壊れてもあなたなら少しも困らないでしょうし、たまには甘いものがほしくなるって ことも、もしかしたらあるのかもしれない。何が起こるかわからないのが人生だものね。でもね 、どうしてもわからないの」

少しの間周囲のざわめきに耳を傾けてから、わたしはあらためて口を開いた。

前回彼女に会ったのは、三ヶ月ほど前のことだ。そしてそのとき彼女は、ほどほどに幸せだったはずだ。少なくともわたしには、そう見えた。相変わらず減らず口を叩いてはいたが、それだけで仲がこじれるようなら、そもそも結婚までたどり着くはずがない。彼女のすべてを知った上で、あのダンナ様は彼女を選んだのだ。そしてわたしはそんな二人の様子を見て、結婚ていうのも案外いいものかもしれないと、そんな感想を抱いた。

例えばこのテーブルの花のように小さくてささやかな夢を、わたしだって見てもいいのかもしれないと、そんなことを思ったのだ。

あの光景はすべて、幻だったのだろうか。

# 「何がよ?」

彼女は顔をしかめたまま、もう一口ココアをすすった。

「あなたが結婚するって聞いたときは、何かの聞き間違いだろうって、もしかしたら幻聴だった のかもしれないって、そう思ったのよ」

電話が切れてからもたっぷり一週間、わたしはそんな疑念を払うことが出来なかった。

# 「何よそれ?」

「だってどうしても信じられなかったんだもの。カバの結婚式のほうが、よほど現実味があるでしょう?」

今朝の朝刊に、動物園でカバの結婚式が盛大に行われたという記事が載っていた。カバ夫婦は 仲良く、特製ウエディングケーキを食べたらしい。

### 「けんか売ってんの?」

ココアを置くと、彼女はわたしをにらんだ。

「でも現実だった。信じがたいけど、現実だったのよね。信じがたいことがある日唐突に起こるのが世の中なんだって、この歳になってわたし、はっきりと実感したわ」

三百年ぐらい生きた男でもない限り彼女を受け入れる人間はいまいと、わたしは常々そう思っていたのだ。でも彼女を受け入れたのは、ごく普通の、どこにでもいるような、端から端まで穏 やかな、ただの男だった。

#### 「表出る?」

「あなたが結婚するぐらいだから、宇宙人が本当にいてもおかしくないって、そう思った」 「殴るわよ」

「それほど驚いたってことを、今説明してる途中なのよ。腰折らないでくれる?」

#### 「馬鹿じゃないの?」

彼女が背もたれに体を預けるのと同時に、一つ向こうのテーブルからまた、ひときわ甲高い笑い声が上がった。何かよほど楽しい話しでもしているのだろう。それに引き換えわたしたちは、 金曜の夜だというのに、何が悲しくて離婚の話しなどしているのか。 「とにかく心底驚いたわたしは、よほどの決心だったに違いないって、そう思ったのよ。もちろん相手のことよ。あなたと一緒に暮らすんだもの、よほどの覚悟が必要でしょう? 並の人間に、そこまで出来るはずがないわ。例えどれほど見てくれが平凡だろうと、万難を排してでもあなたと暮らすことを選んだんだもの、これは本物かもしれないって、そう思ったのよ」

「はいはい、で、いったい何が言いたいの?」

言いながら、彼女はぐるりと首を回した。

「肩でも凝ってるの?」

「仕事が詰まってるのよ。長編の翻訳を引き受けたから」

自宅に引きこもって、他人が英語で書いたものを日本語に翻すのが彼女の仕事だ。

「大変ね、仕事は詰まるわ離婚はするわ」

「だから、あなたが聞きたいことはいったい何?」

「離婚の理由は何?」

躊躇することなく、わたしは一息にたずねた。

つい三ヶ月前まで何の綻びもなく幸せそうにしていた夫婦が突然離婚をした、その原因はいったい何だったのか。

店の裏通りから、車のクラクションが聞こえた。このあたりは一通が多く、歩いている分には何の変哲もない道だが、車で通るにはひどく複雑な道なのだ。思う方向になかなか抜けられない車が、ああして腹立ちまぎれのクラクションを鳴らすことも珍しくない。

「子どもが出来たのよ」

彼女は短く息をつくと、ごく簡単にそう言った。

[....

言葉としては簡単だったが、その意味を理解するには時間が必要だった。

「何馬鹿みたいに口開けてんのよ。聞こえたの?」

「一応は」

頷いて見せはしたが、まだ何一つ飲み込めていない。

「それが理由よ」

面倒そうにそう言うと、彼女はまた、窓の外に視線を向けた。

「聞いてもいい?」

その彼女の横顔を、わたしはじっと見つめた。

「何?」

「誰に?」

「は?」

発音練習のようにはっきりと、彼女はその一語を口にした。

「だから、誰に?」

「いつから本物の馬鹿に成り下がったの?」

「だって・・・・」

「ダンナに子どもが出来るとでも思ってんの?」

## 「思わないけど・・・・」

少し前から、自分の中で何かが引っかかっていることには気付いていた。物忘れでもしているときのような妙にもやもやとした感覚なのだが、ほんのかすかなものでもあり、さほど重要なこととも思えなかった。そのもやもやがどういうわけか今、彼女のこの一連の発言に、反応を示している。

「女よ」

彼女は大して興味もなさそうに、ぽつりとそう言った。

 $\lceil \cdots \rceil$ 

ニコニコと唐揚げを揚げてくれたダンナ様の顔を、わたしは思い浮かべた。どこをどう切っても同じ顔が出てくるに違いない、実直という言葉を半紙に書いて貼り付けたような、そんな印象の人だった。結婚相手に対して彼女が求めていたものが何だったのか、そのときようやく判った気がしたのだ。三十をいくつも過ぎて、それまで何人かの男と付き合って、行き着いたいと願う先は確かにこんなところなのかもしれないと、我がことのように納得したのを今でも憶えている

「呆れたでしょ?」

彼女が肩をすくめた。

「ううん」

わたしは首を振った。

「いいわよ、無理しなくても」

「無理なんかしてない。ただ、信じられないだけ」

「でしょうね」

そう言うと彼女は、今日初めて、笑顔らしい笑顔を見せた。

「ついうっかりだったんだって。ついうっかり酔っ払っちゃって、ついうっかり眠くなっちゃって、ついうっかりそのまま部下の女の子の部屋に行っちゃって、自分では家に帰ったつもりだったってところが笑っちゃうんだけど・・・・朝起きてみたらぜんぜん違う部屋で・・・・挙句に、その彼女に子どもが出来ちゃったんだって」

いったい何が面白いのか、彼女はくすくすと笑い続けた。

[....]

「ね、呆れたでしょ?」

「うん」

「正直ね」

「うっかりにも程がある」

あの実直男がいったいどんな顔をして、そんなことを仕出かしたのだろう。いったいどんな顔をして、それを彼女に打ち明けたのだろう。

「まあ、彼にしてもずいぶん悩んだみたいよ。根が真面目な人だしね、あたしに言い出すまでに 、相当苦しんだみたい」

店の中のざわめきが、ひどく耳障りで空々しいものに聞こえた。話し声も笑い声も今は、たち

の悪い雑音でしかない。

「様子がおかしいことには、さすがに気付いてたわよ。でもまさかそんなことになってるなんて、思いもしなかった。・・・・しょうがないから、たたき出してやったの」

言うと彼女は、一番彼女らしい顔でにっと笑った。

「この寒空に?」

「馬鹿ね、ものの例えでしょ。それに、たたき出したときはまだ寒くなかったわよ」

「ああ、そっか」

わたしは頷くと、さっきよりも少し位置を変えた半月に目をやった。

上手くいくようでいて上手くいかないのが世の中だということは、さすがにそろそろ判りかけてきていた。そんなふうにしてどこかで、帳尻はあっているらしいということも。でも、何故しわ寄せは彼女の元でなければならなかったのか。こう見えても彼女は、口こそ減りはしなかったが、結構生真面目に生きてきたのだ。

「家に帰った気でいたなんて、直に触れておいて、何で気付かないんだろ」 さらりとした口調だったが、今日一番の本音だと、すぐに気付いた。

「触れただけで本心にまで気付くのは、案外女だけなのかもね」

「何て含蓄のあるお言葉」

「いいわよ、翻訳のネタに使ってくれて」

二人して同時に吹き出してから、ひとしきり笑った。

「ま、しょうがないわね」

彼女は言うと、残っていたココアを飲み干し、そしてまた顔をしかめた。

「いまさら慰められたくなんかないでしょうから、慰めないわよ」

「お気遣いありがとう」

「どういたしまして」

三十をいくつも超えた女同士の友情なんて、こんなところだろう。不必要にしがみつくには体力が必要で、悲しいかな、割り切り時というものをちゃんと心得てしまっている。そしてそれを、無言のうちに推奨しているのだ。彼女とわたしの立場が逆であったとしても、おそらくは、似たような会話が交わされたに違いない。

「・・・・話して、ちょっとすっきりしたかな」

そのいつになく素直な物言いに、もやもやとした引っかかりの正体が、ふいに見えた気がした

「それはよかった。ねえ、ついでにもう一つの隠し事も、話してみる気はない?」 わたしの言葉に、彼女が息を止めた。

わたしの中では、彼女がやってきてから目にしたいくつかの断片が、気持ちのいいほどすっきりとした形となって、一つの現実を作り出していた。

「な、何よ」

「話してしまいなさい」

[....

「往生際の悪い」

彼女は目を伏せると、この期に及んで逡巡しているようだった。

「妊娠、したんでしょ?」

何をいまさら迷うのかと、わたしは内心ため息をついた。

「元ダンナ様には話したの?」

「・・・・話してない」

「何で?」

「言いたくない」

「でも、言わないわけにはいかないでしょう?」

「気付いたのが、たたき出した後だったのよ。なんだか後出しじゃんけんみたいで、かっこ悪いじゃない」

格好の問題かと思ったが、あまりにも彼女らしくて、何も言えなかった。

「・・・・で、仕事の都合はつくの?」

産むのかなどと、無意味なことを聞くつもりはさらさらなかった。いったんは夫として認めた 人間の子どもだ。彼女の気性を考えれば、誰かに打ち明けることを決めた時点で、他の選択肢な どすでに切り捨てられているだろう。それでも、不安だったに違いない。自分にどこまで出来る のか。自分に果たして勤まるのか。そんな不安も含めて、彼女が行き着いた先は、わたしへの呼 び出し電話だったのだ。

受けて立とうじゃないの。

三十をいくつも超えた女同士の友情は、打たれ強さという点において、たぶん他に引けをとらないのだから。

「大丈夫だと思う。今受けてる長編が予定通り片付けば、ある程度まとまった金額も入るし」 「そう。予定日は?」

「六月」

「なら、こっちも付き合えると思う。有給もたまってるしね」

「・・・・ごめん」

何とも似合わない言葉だと思ったが、だからこそ、そこに嘘など入る隙はないのだろうとも思った。

「貸しよ。ちゃんと返してもらうわよ、もちろん」

「わかってるわよ」

苦笑いの彼女だったが、目のふちには、あまり見たこともないものがにじんでいた。